

安然による空海撰『即身成仏義』の受容について

大久保良峻

一

日本密教史において、安然の業績をいかに評価するかということは重大な課題である。特に、安然が空海の批判者であるのみならず、空海の教説に大きな影響を受け、それを継承した学匠であることは注目を要する。⁽¹⁾

但し、その点をより明らかにするには、個々の事例を探っていく以外ない。そこで、本稿では、空海の『即身成仏義』を中心として安然と空海の関わりを検討し、更には『即身成仏義』が持つ幾つかの問題点を指摘することにした。話は『即身成仏義』の真偽にまで及び、それが偽撰であることを可能性としては認めることになろうが、真撰であることを種々の観点から論じて来た古来の説を否定するものではない。従って、真撰であることを前提にして話を進めていくが、そこから発生する疑問点を掲げることになるであろう。

安然の『八家秘録』（『諸阿闍梨真言密教部類惣録』）巻上には

「真言宗即身成仏義・四種曼荼羅義・文字実相義一卷」⁽²⁾の如く、三書を撰者名を示さずに纏めて記している箇所がある。

この『即身成仏義』・『四種曼荼羅義』・『文字実相義』（『声字実相義』）という三書は、安然の『教時問答』や『菩提心義抄』では、やはり撰者名は明記されないものの、非常に尊重されている。尚、『四種曼荼羅義』や『四種曼荼羅義口決』は近年、偽撰説が主流となり必ずしも重要書として扱われていない嫌いもあるが、直ちに空海が著したものではなくとも、空海の口説に基づいたものと見る研究もある。⁽³⁾

史実としては、これらの典籍は東密の教学を支える教義書として、諸学匠によって研鑽されて来た。特にその根源となっているのは、承和二年（八三五）正月廿二日の太政官符であり、そこでは、金剛頂瑜伽経業・大毘盧遮那成仏経業・声明業という三人の年分僧にそれぞれ『四種曼荼羅義』・『即身成仏義』・『声字実相義』の習学が要求されている。但し、翌廿三日の太政官符も存在し、それは金剛頂業・胎藏業・声明

業の年分度者三人を掲げるものの、右の三書への言及がない。⁽⁴⁾この二つの太政官符のうち、特に前者についての疑問が出されている。⁽⁵⁾確かに、金・胎・声明に各一書を対応させることに問題がないわけではなく、例えば有快の『即身成仏義鈔』巻一には、「凡高祖御製作書、教部雖有之、正所學^ニ學^ニ處、今書并四種曼荼羅義、声字義三部也。声字義^ヲ、声明業^ヲ、四曼義^ヲ、為^ニ金剛頂業^ノ所學^ト、今書、為^ニ胎藏業^ノ所學^ト。付^レ之、見^ニ今書前後^ニ、所引經文^ハ互^ニ兩部^ト。然者、被^レ定^ニ胎藏業^ノ所學^ト、其深意難^レ測^ル……」⁽⁶⁾というような記述が見出される。

しかしながら、右の有快を含め、東密の諸学匠が前者の官符により上記三書を尊重して来たことも事実である。以上のことから、前者の官符が大きな役割を担って来たことが知られるとともに、三書が密接な関係にあることが推知される。

さて、『即身成仏義』の偽撰説が見られるのは島地大等氏の『日本仏教教学史』⁽⁷⁾である。しかし、そこには、「安然是大師の十住心を破すけれども、六大思想に就いては何等の言及がないのである。思ふに弘法大師以後、十弟子及び入唐四家の間に成つた書物ではなからうか。」と示されるが如く、安然による引用を見落とすような全く初歩的な誤りも見られ、その偽撰説は否定されている。しかも、この書は島地氏自身によって纏められたものではないためか、別の箇所には、『即身成仏義』は……恐らく藤原時代の後半期に偽作さ

れたものではないかと思はれる。」とあり、前記した文中で想定している作者と、年代的に整合していない。加えるに、同氏の『天台教学史』(第四編第九章「五大院安然の密教」)では、「もとより『教時義』一部の中にありては往々にして六大の説あるを見ると雖も、しかも安然はこれをもつて本体となせるものにはあらず。……しかも安然が往々にして六大の語を使用せしものはまったくこれ東密の影響を受けたるによる。」と、安然が東密の影響下に六大の語を用いていることを論じている。

このように、島地説は最初から問題を孕んでいた。従つて、島地説が否定されたとしても、そのことが直ちに『即身成仏義』の偽撰説を払拭することにはならないのである。

また、『声字実相義』には、「此五大具^ニ顯密^ノ二義^ト。顯五大者、如^ニ常釈^ト。密五大者、五字・五仏及海会諸尊是。五大義者、如^ニ即身義中釈^ト。此内外五大、悉具^ニ声響^ト。」⁽⁹⁾とあり、この中に、「五大義者、如^ニ即身義中釈^ト。」という記述が見られる。この文についても、島地氏は『日本仏教教学史』で、『声字実相義』には……更に「五大義者如^ニ即身義中釈^ト」とあるによれば『即身成仏義』は大師の真撰の如くであるけれども、恐らく此の一句は後人の加筆であらう。」と述べているが、この「五大義者如^ニ即身義中釈^ト」という句も安然の引用する『文字実相義』の中に見られるという理由で、やはり

安然による空海撰『即身成仏義』の受容について（大久保）

鳥地説は却けられている。ところが、その根拠である『教時問答』巻四の文は、「……顯五大者、如常積。密五大者、五字・五仏・海會諸尊是。五大義、（如即身義中積也）此（内）外五大、皆具三聲響⁽¹⁰⁾」のようになっていて、括弧の部分は、古写本には見られず、天台宗叢書本や日藏本に見られるのである。また、同じ文は『教時問答』巻三にも引用され、それは単に、「……顯五大者、如常積也。密五大者、五字・五仏。此〔内〕外五大、悉具三聲響⁽¹¹⁾」となつている。こういった議論は、『声字実相義』の成立に関わり、また、『即身成仏義』の真偽判定にも必ずしも有効ではないので、今はこれ以上立ち入らない。

二

それでは、安然は空海の『即身成仏義』をどのように受容したのであろうか。このことについて注目すべきは『菩提心義抄』巻一に見られる次の記述である。

問。抑言即身成仏者、為即於二生成仏、為凡夫即身成仏。問。兩義俱得。即於二生成仏如前。又凡夫即身成仏者、如即身

成仏義云。六大無碍常瑜伽体。四種曼荼各不離相。三密加持

速疾現用。重重帝網名即身^{無碍}。法然具足薩般若^{成仏}。心

教心王過^{利塵}無數。各具^{五智}無際智^輪。円鏡力故実覚智^由所

此四句明^{成仏二字}

問。頌意云何。

答。若覺凡夫身中^{大地水火風空識}即是法界体性、即以凡夫六大直成^{諸仏}。諸仏六大^名即身成仏。……

問。天台有云、一生心雖成仏、本業報身、必可捨也。有云、父母生身變成法性。一切色心、皆是法性。更何取捨。此二義中、^{今同何義。}

答。今同後義⁽¹²⁾。

ここで重要なのは、即身成仏に一生成仏と凡夫の成仏の二種ありとし、「六大無碍常瑜伽」に始まる『即身成仏義』の二頌八句を凡夫成仏の意に解し、凡夫の六大が直ちに諸仏の六大になることが即身成仏であるとしたことである。そして、その後で生身の捨・不捨の問題に言及し不捨の義を採択しているが、これは生身（分段身）から法性身に移る時の問題であり、凡夫成仏の話題ではない。

このように、安然が凡夫の成仏を『即身成仏義』に依拠して説いたことは、後の東密の学匠にも大きな影響を与えることになった。例えば、濟暹の『金剛頂發菩提心論私抄』巻四には、「修^三行余教菩薩、捨^二分段身^一以後、更得^三變易身^一、後而証^三仏果^一故、不^二即身成仏義^一。修^三行此教^一直生菩薩、不^レ捨^二分段身^一、頓証^三仏身^一也。是真即身成仏正意也。即身成仏義之意、如^三菩提心義云^一。抑言^三即身成仏^一者、為^レ即於^二一生成仏^一、為^レ凡夫即身成仏。答。兩義俱得。即於^二一生成仏如^三

前文。凡夫即身成仏者、如_二即身成仏義云。……文⁽¹³⁾と見出される。但し、後の生身（分段身）の捨・不捨の議論については、『菩提心義抄』の引用に続けて、「而今私曰、可用_二初義云云、稱_二真言意一故。又涅槃經云、捨_二無常色受相行識、獲_二常住色受相行識云云。秘藏記意、与_二初說一同也。後說只稱_二天台意也。不_レ稱_二此菩提心論之密宗義也。」と説くのであり安然とは対照的に捨の義を採っている。

また、性心の『即身義鈔』上之本では、冒頭に「一、以_二今書_一為_二胎藏所學一事」として、前述した『四種曼荼羅義』（金剛頂經業）・『即身成仏義』（大日經業）・『声字実相義』（声明義）という三書を記す太政官符を掲げ、更に次のように言う。

問。今書被_レ引_二証_一即身成仏八箇文中、六箇文金剛頂部經論、二箇文大日經也。爾者、金剛頂部文多_レ之。何被_レ定_二胎藏業人所學書一耶。

答。即身成仏義者、六大義也。是以、安然菩提心義一之即身成仏義言、若覺_二凡夫身中六大、即是法界体性、即以_二凡夫六大直成_二諸仏六大_一故名_二即身成仏_一文。此積意、即身成仏專依_二六大_一見。然大師被_レ積_二六大無碍文_一時、多被_レ引_二証_一大日經。知即身成仏依_二胎藏_一者也。

ここでの論旨は、『即身成仏義』が胎藏業に属することを証明するところに置かれ、その中で『即身成仏義』を活用した安然の説に論及しているのである。

安然による空海撰『即身成仏義』の受容について（大久保）

即身成仏を『即身成仏義』によって論ずる時、極めて重要なのは「六大無碍常瑜伽」以下の二頌八句の理解である。このことについて、最も早い時期に言及したのが安然であることに注目する必要がある。

尚、この頌が空海の『大日經開題』⁽¹⁷⁾のうち二種に引かれていることは知られているが、もう一つ見逃せない文献がある。それは、空海口説、真濟記の『高雄口訣』であり、そこでは『即身成仏義』の二頌八句を「四種曼荼羅頌」と呼んでいるのである。空海の晩年の口説が記されるこの書で、今の二頌八句にそのような呼称を与えたということは、『即身成仏義』の成立年次がそう早いものではない可能性を示唆することになるのではなからうか。

三

『即身成仏義』にはその他にも色々と問題がある。特に、そこに引用された経論をめぐることは、必ずしも一概に理解しえない要素があるように思われる。例えば、『即身成仏義』の二頌八句以前に引かれる二經一論八箇の証文の中に、「大日經云、不_レ捨_二於此身_一、速_二得_二神境通、遊_二步大空位_一、而成_二身秘密_一。」⁽¹⁹⁾という『大日經』卷三の記述は、単に神境通を得ることを説いた文である。そこで、性心は『即身義鈔』卷上之本で、「於_二此不捨於此身_一文、含_二淺深兩意_一。」⁽²¹⁾と述べている。

安然による空海撰『即身成仏義』の受容について（大久保）

また、『即身成仏義』の冒頭に引かれる『金剛頂経』が、『金剛頂経一字頂輪王瑜伽一切時处念誦成仏儀軌』の文であることは知られているが、この儀軌が空海の『御請求目錄』に見られないことは大きな問題である。この点について、今は頼宝説・梶宝記の『即身義東聞記』巻一と、宥快の『即身成仏義鈔』巻一の説を示しておくことにしたい。

金剛頂経者、今軌不空所訳、金剛頂一字頂輪王瑜伽一切時处念誦成仏儀軌文也。今此儀軌、高祖請求録中不載之。八家秘録、仁・珍・巴覚請求云云。就之古来有多義。一義云、雖請求、秘要故、録不載之。如大日経等。一義云、八家請求以前、梵积寺本経軌有之。此軌若彼為隨一歟。一義云、高祖於三金輪法一者、雖請求、今儀軌必不請來之歟。雖然、憶持要処、載製作中歟。例陀羅尼集経、雖三宗叡請求、秘鍵中如載之。

頼宝説・梶宝記、『即身義東聞記』巻一或一義云、……而御入唐已前、本朝請求経軌等有之。如此経軌、不書写、請求事有之。今儀軌其隨一歟。一義云、雖無御請求、於大唐有御伝受故、於所要文等者、有御暗誦引証給也。一義云、即身成仏、自宗肝心故、其文義等於大唐御相承時、今八箇文証并二頌八句頌文別相承之故、今全被載此文証頌文等也。或一義云、今即身義、惠果御製作也。大師請求之歟。……但此一義大非也。大師御筆御草本、当山有之。文字等、或消、或直本、是直大師御製作也。仍此義不足信用。一義云、此経、大師御請求也。非慈覚・智証請求儀軌。其故、彼此題目各別

也。大師御請求題、一切時处成仏、六字無之、以之為異。此題目儀軌、現有之。……但不載御請求録事、不限此経、録外経多之。……

宥快、『即身成仏義鈔』巻一

両書に共通して見られるのは、目録にはないが実は請求したという説、もともと日本にあったという説、その文を覚えて来たという説である。そして、更に、宥快の『即身成仏義鈔』の方には、二経一論八箇の証文、及び二頌八句は別して相承して来たという説や、直ちに否定する説ではあるが、『即身成仏義』が惠果作であるという説も列記されている。

こういった問題は現在あまり論じられないことがない。しかしながら、古来の学匠たちは『即身成仏義』を空海の真撰と認めるべく様々な角度から疑問点を掲げて議論を展開している。そういった積み重ねがあつて、空海の真撰であることが揺るぎないものとされて来たのである。ところが、その撰述年代も明確ではなく、しかも上述の如く必ずしも真撰であることを容認しえない要素も見出されるのである。

結

ここで小稿の要点を纏めておくことにする。先ずは安然の位置づけである。結論的に言えば、安然は空海以後に展開する日本密教の幹流の一人であり、従つて、その研究は空海の

密教を解明する上でも不可欠であるということである。

二つ目には、空海の『即身成仏義』の真偽の問題である。このことを考える上で、従来の議論でも安然による引用が大きな意味を持っていた。しかし、それが空海の真撰であることを保証するものでないことが知られたのではなからうか。但し、本稿は偽撰を積極的に導くものではない。

更に、もう一点加えるならば、『即身成仏義』の評価の問題がある。本書が非常に充実したものであることは言うまでもないが、そこに引かれる経論や儀軌の文が教義的な問題点を種々有していることは注意が必要である。それらが、後の諸学匠によって多様に論じられ、即身成仏論が充実していくことは見落とせない。要するに、『即身成仏義』を密教における即身成仏思想の出発点と見るべき要素も少なからずあるということである。

- 1 拙稿「安然の教学における空海」（『天台学报』三七）参照。
- 2 仏全一・一六頁上。尚、安然が見ていた『四種曼荼羅義』は、『四種曼荼羅義』と『四種曼荼羅義口決』のうち、後者に一致するようである。
- 3 真保竜敏「四種曼荼羅義の成立について」（『印仏研』一九一）。
- 4 廿二日と翌廿三日の太政官符を並記し論じているものに、果宝の『東宝記』巻八（『続々群書類従』一二・一五〇頁下～一五三頁上）がある。廿三日の方は、『類聚三代格』巻二所収。
- 5 その、議論の発端となったのが、守山聖真（文化史上、弘法大り見たる）

安然による空海撰『即身成仏義』の受容について（大久保）

師伝』（八五五頁～八六一頁）である。

- 6 真全一三・一七四頁下～一七五頁上。
- 7 一三四頁～一三七頁、及び一六一頁～一六四頁。
- 8 大山公淳「即身成仏義述作考」（『密教研究』七〇）、勝又俊教「即身成仏義をめぐる問題点」（『宗教研究』三六一三）等。
- 9 大正七七・四〇二頁中。同書には「此是身密、其数無量。如三即身義中积。此身密則実相也。」（四〇二頁上）という文もある。
- 10 大正七五・四三一頁下。
- 11 大正七五・四二二頁中。
- 12 大正七五・四七二頁上中。
- 13 大正七〇・二八頁上～下。
- 14 『涅槃經』卷三九（北本）、大正二二・五九〇頁下、卷三五（南本）、同八三八頁中。（略抄）。
- 15 『秘藏記』（真全九・一八頁上）には、「凡仏者、捨有漏五蘊等身、有無漏五蘊等微細身。」とある。
- 16 真全一三・七九頁上下。
- 17 大正五八・二頁上、一一頁下。
- 18 大正七八・三七頁中。
- 19 大正七七・三八一頁下。
- 20 大正一八・二二頁上。
- 21 真全一三・九五頁下。
- 22 統真全一七・四九頁下。尚、現行の『八家秘録』には、円覚（宗叡）を請来者とする記載はない。
- 23 真全一三・一八六頁上～一八七頁上。

〈キーワード〉 安然、空海、『即身成仏義』

（早稲田大学助教授）